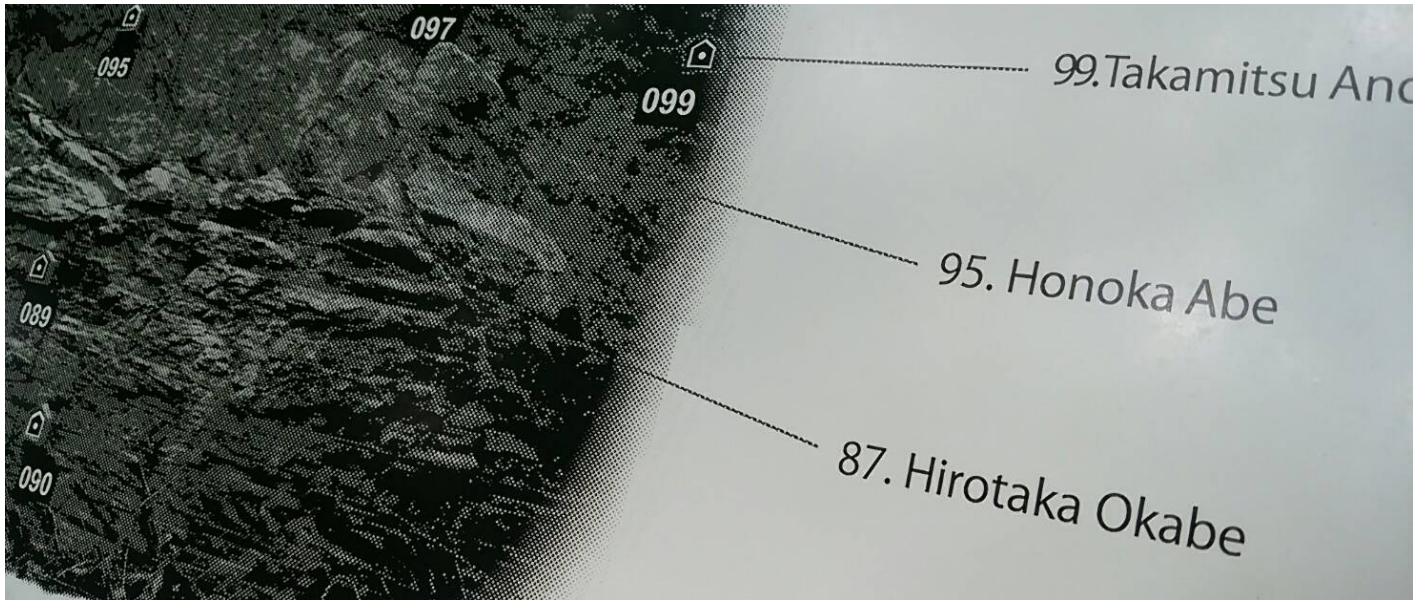


感じる

現代の磨崖仏
古代の鬼

宮島達男 HUNDRED LIFE HOUSES

現代の磨崖仏



現代の磨崖仏

高さ30m

幅16m

奥行8m

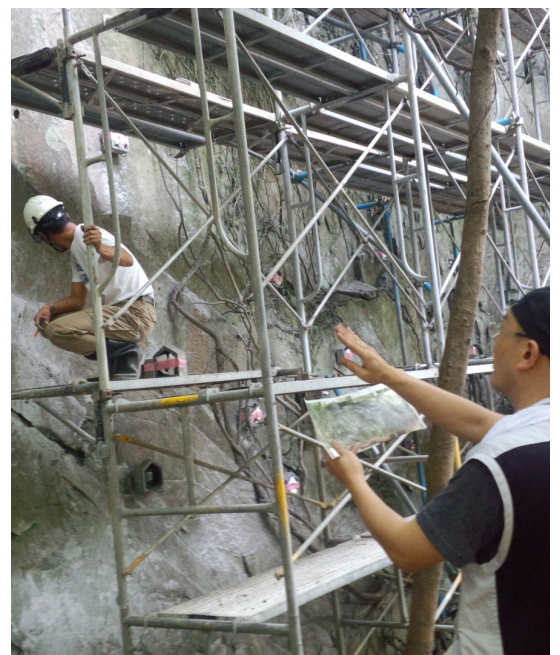


現代アートとして作られたこの現代の仏は、LEDのデジタルカウンターで装飾した実在する100人の家族の家(ハウス)から成る。これらの名前は、地元だけでなく、全国から一般の応募を募った。カウンターのスピードは人それぞれ。

この岩陰は、1万2000年前の縄文時代の遺跡として、国東市から認定されている。出土品は、人骨、獣骨、石器および土器である。

現代美術家の宮島氏は、芸術祭のスタッフにこの場所を案内された際、代々人々によって住まれてきたこの場所に力を感じ、この場所に現代の磨崖仏を作りたいと思ったとのこと。

この芸術祭は、芸術の力により国東半島を活性化しようという試みで、2014年に開催された。国東市にはこれ以外に2つのパブリックアートがある。設置されたアートは、芸術家の感性や意図、維持費、耐久性などから選定された。





成仏寺

修正鬼会

国東半島で1000年以上続く

1977年、国指定重要無形民俗文化財に指定
2018年、鬼が日本遺産に認定(鬼が仏になった里)

伝統ある鬼会に是非お越しください!

里の鬼が仏に重ねられる

異郷の国東文化



先祖でもある鬼

日本には、鬼に纏わる伝説が多く存在する。一般的に鬼は2本の角があつて口が大きく、人々を怖がらせたり不幸せにするもの。しかしながら、国東の鬼は違う。富と幸せをもたらしてくれる。この土地に住む鬼は大らかでユーモアたっぷり。

この行事は、旧正月に、若い人たちが松明を振りかざして始まる。鬼面を付けた僧侶が、他の鬼を招きだす。他の鬼もやはり僧侶が扮している。鬼たちは、参拝者の豊作と健康を祈祷する。参拝者も祭りに参加し、さらに鬼は地区の家々を回り仏壇に参る。家では鬼を歓待する。地区を回った鬼が境内に戻ってくるのは夜中。暴れまわる鬼は餅をくわえさせて静まり、鬼会は終了する。

国東の民俗学によれば、鬼は、祖先の靈魂であり、正月に幸福をもたらすために訪れるとされている。この風習が仏教儀式と重なり、特徴ある修正鬼会に発展した。

